

上毛かるたの成り立ちと歩み

——群馬郷土文化の発見——

社会情報学部 14684002 夏嘉芬

序章 (Introduction) :

かるたとは、カードを使った主に正月に遊ぶ室内遊具である。その名称はポルトガル語で「手紙」(葡: Carta)、あるいは紙板状のもの、トランプなどを意味する carta に由来する。一般的には、百人一首を用いた「百人一首かるた」というは歌を用いた「いろはかるた」に分けられる。日本文化いろは事典によると、百人一首かるたは、藤原定家が撰んだといわれる「小倉百人一首」を使ったもので、競技用に用いられるなど、一般に普及しており、かるたといえば百人一首かるたの事を指すという。しかし、群馬県人としては、「かるた」と言えば「いろはがるた」ではなく、「上毛かるた」である。

いろはかるたの中の上毛かるたは、1947年(昭和22年)に発行された郷土かるたである。郷土かるたというのは、地域の自然や偉人、歴史、産業などを詠み込んだものである。都道府県、市町村、学校区域など種類は様々。記念品や観光客の土産用のものが多い。群馬大の山口幸男教授ら(2009)のまとめでは、2001年7月現在、日本全国に535種あり、ピークの85年には37種が作られた。最近では、合併でなくなる市町村が記念品とするケースが目立つという。特に群馬県と埼玉県に多く、両県で170種が確認されている。たとえば、埼玉県の歴史や自然をテーマにした「彩の国21世紀郷土かるた」が制作された。上毛かるたも全44枚カードの中で、群馬県の土地、人、出来事を詠んでいる。山口ら(2009)の研究によると、群馬県は上毛かるたをはじめとして、日本全国最多の郷土かるたを有する郷土文化の最大中心地である。本稿は上毛かるたの成り立ちと歩みを研究したものである。また、群馬の郷土文化を理解することが不可欠である。

従来の研究では、上毛かるたの形成背景と札の特徴が明らかになっている。しかし、群馬の郷土文化の流れについての研究は少ない。本研究では、群馬の郷土文化の検討を行いたいと考えている。本論文の構成は次の通りである。第1章は、上毛かるたの成り立ちを分析する。第2章では、上毛かるたの札の分析と遊び方について述べる。第3章では、上毛かるたの魅力と影響を考察し、さらに第4章では、上毛かるたに見られる日本文化の姿を考える。

第1章 (Chapter 1) : 上毛かるたの成り立ち

(1) 上毛かるたの発行の経緯

上述した通り、昭和 22 年に上毛かるたは発行された。発行時期が昭和 22 年ということとはとても大事なことである。久保田福美 (2015) によると終戦直後のその時代、敗戦後の世情は混乱し、戦争孤児・寡婦などの境遇は悲惨なものだった。また、GHQ (連合国軍最高司令官総司令部) の指令により、学校教育での地理・歴史の授業は停止されていた。群馬県も戦争の惨禍にあって、郷土が荒廃に帰し、衣食住も不十分で、その中で子供たちが迷っているという状況になった。1946 年、群馬県出身の浦野匡彦は満州から故郷へ引き揚げ、戦争犠牲者の支援に取り組んでいた。人一倍郷土を愛し、誇りに思っていた浦野は、群馬の子供たちには愛すべき故郷の歴史、文化を伝えたい、という思いを募らせていった。

早速、上毛かるたの構想を発表し、読み札に詠む題材を公募した。その結果、272 通の応募があった。山口ら(2009)によると、それらを郷土史家や文化人ら 18 人からなる編纂委員会が選定し、七五調の読み札に作り、絵札を当時の群馬県の画家の小見辰男に依頼して完成した。その年内に初版 12,000 組が発売された。

(2) 上毛かるた競技県大会の発展

翌 1948 年 (昭和 23 年) には第 1 回上毛かるた競技県大会が開催される。この後今日まで 60 回以上の大会が続けられている。これがまた非常に重要なことである。大会のきっかけといえば、当時、多くの県民が上毛かるたの理念に賛同し、何とか成功させたいと一丸となって県内各地でかるたの予選競技を行ったことである。大会の出場者は県内の小・中学校や各地区子供会の児童・生徒で、小学生の部と中学生の部に分かれ、さらに各部内で団体戦と個人戦に分かれている。競技県大会を通じ、群馬県の多くの子供が上毛かるたに対する興味が深まり、熱も高くなってきているということである。

群馬文化協会(1997)によると、競技県大会は毎年 2 月に開催されている。その前年の 12 月ごろから各地区子供会および各小・中学校レベルでの予選ともいえる大会を行い、その勝者が各市町村レベル、郡レベルの大会に進み、さらにそこでの勝者が各郡市の代表選手として県大会に出場するという仕組みになっているという。

今まで上毛かるた競技県大会が 68 回開催された。第 1 回目の会場は前橋市南曲輪町の商工クラブであり、そのあと何回か場所を変え、現在は前橋市岩神町の県立武道館になっている。

そして、小中学生を対象とした『上毛かるた競技県大会』があるだけではなく、今は、18 歳以上が参加可能な『おとなたちの上毛かるた日本一決定戦「KING OF JMK」』もあるし、親子三世代または家族を対象とした『ヤマダ電機上毛かるたファミリー大会』などの大会もあるそうである。

上毛かるた競技県大会を開催している群馬県子ども会育成連合会では、かるたの競技ルールを多くの人々に周知するために、審判員及び読み手としての資質を培う講習会を

開催し、子供に対する紹介活動も行い、様々な宣伝活動を展開している。

(3) 上毛かるたの歴史を振り返って

「上毛かるた」の初版が発行されたのは昭和 22 年である。この 68 年の歴史の中で、上毛かるたにもさまざまな変化があった。山口ら(1995)によると、上毛かるたの読み札の中で、時間の変化とともに書き改められた札が一種ある。それは、県民人口を表す「ち」の札、すなわち「力あわせる二百万」である。制作当初の人口は 160 万だったが、その後の県民人口の増加に伴い、10 万人ごとに修正され、各時代に対応してきている。これは他種の郷土かるたには見られない「上毛かるた」の特色の一つである。「上毛かるた」で遊んだ世代ごとに時代の遷移が味わえる粋な計らいと評価できるが、今日「上毛かるた」を発行している群馬文化協会によると、この修正は制作当初予定していたものではなく、全くの偶然の産物だったという。

そして、上毛かるたの「絵札」の図案は、昭和 22 年の初版から 20 年を経過したのを機に、小見辰夫画家みずから描き改め現在に至っている。新版は昭和 43 年の発行分から使われている。

この 68 年の間、上毛かるたによる郷土愛を高める運動は、単に競技大会を行うだけにとどまらず、当時物心ともにすすんでいた県民のところに、郷土愛精神の高揚と一種の道しるべ運動を起こすという意味で、上毛かるたに関連した立札運動を行った。群馬文化協会(1997)によると、それはかるたに読み込まれた 44 か所の現地に、読み札の文句を書き込んだ木製の立札を立てて県民一般に郷土群馬についての再確認を呼びかける運動だったという。これらの立札は、今日はほとんど見られなくなってしまったが、貫前神社は大切にしてくれている。

そして、上毛かるたは、昭和 27 年 3 月 7 日には、児童福祉法に基づいて設けられた群馬県児童福祉審議会から、「児童福祉のために役立つ優良文化財である」として推薦されている。群馬文化協会(1997)によると、一般に優良文化財に推薦されるものには、映画や図書等が多く、こどもの「遊び」に関するものが推薦されたのは珍しいことのようにある。

第2章 (Chapter 2) : 上毛かるたの札の分析と遊び方

(1) 上毛かるたの札の分析

上毛かるたの札は44枚ある。インターネットより資料をまとめると、子供たちに群馬の歴史、文化を伝えたいという趣旨から、群馬県の人物、地理、風物などが幅広く読まれている。読み札の裏には、その札の説明が書かれている。人物としては、新島襄、内村鑑三、関孝和、新田義貞、田山花袋などが採り上げられている。地理、風物に関しては県内主要都市（前橋・高崎・桐生・伊勢崎・太田）をはじめ、上毛三山（赤城・榛名・妙義）や、全国に知られた草津・伊香保・四万などの名湯のほか、富岡の貫前神社、館林の茂林寺、下仁田のねぎ・こんにやくなど、県内各地から選ばれているという。

① 読み札の分析

ここでは山口ら(1995)の研究を紹介する。

第1表は昭和22年に発行された「上毛かるた」の読み札であるが、今の読み札の内容は少し変わっている。たとえば、上述した通り、最初の「ち」の読み札は、「力あわせる百六十万」だったが、それから、「力あわせる百七十万」、「力あわせる百八十万」、「力あわせる百九十万」にわり、あとは「力あわせる二百万」になった。今の群馬県の人口は200万人よりも少し減っているが、相変わらず「二百万」になっている。

第1表 上毛かるたの読み札

い	伊香保温泉 日本の名湯	う	碓氷峠の 関所跡
ろ	老農 船津伝次平	の	登る榛名の キャンプ村
は	花山公園 つつじの名所	お	太田金山 子育呑龍
に	日本で最初の 富岡製糸	く	草津よいとこ 葉の温泉
ほ	誇る文豪 田山花袋	や	耶馬溪しのぐ 吾妻峡
へ	平和の使徒 新島 襄	ま	繭と生糸は 日本一
と	利根は 坂東一の川	け	県都前橋 生糸の市
ち	力あわせる 百六十万	ふ	分福茶釜の 茂林寺
り	理想の電化に 電源群馬	こ	心の燈台 内村鑑三
ぬ	沼田城下の 塩原太助	え	縁起だるまの 少林山
る	ループで名高い 清水トンネル	て	天下の義人 茂左衛門
わ	和算の大家 関 孝和	あ	浅間のいたずら 鬼の押し出し
か	関東と信越つなぐ 高崎市	さ	三波石と共に 名高い冬桜
よ	世のちり洗う 四万温泉	き	桐生は日本の 機どころ
た	滝は吹割 片品溪谷	ゆ	ゆかりは古し 貫前神社
れ	歴史に名高い 新田義貞	め	銘仙織出す 伊勢崎市
そ	そろいの支度で 八木節音頭	み	水上 谷川 スキーと登山
つ	つる舞う形の 群馬県	し	しのぶ毛の国 二子塚
ね	ねぎとこんにゃく 下仁田名産	ひ	白衣観音 慈悲の御手
な	中山道しのぶ 安中杉並木	も	紅葉に映える 妙義山
ら	雷と空風 義理人情	せ	仙境尾瀬沼 花の原
む	昔を語る 多胡の古碑	す	裾野は長し 赤城山

「上毛かるた」の読み札は、その一句の中に複数の題材を読んでいる場合が多い。ここでは読み札の文脈から判断して、一枚の読み札につき主要と思われる題材を原則として一つ取り上げることにする。第二表を見ると、読み札の内容の分類がわかる。

第二表 「上毛かるた」の読み札の内容の分類

分類	事 象 名	分類	事 象 名
自然	利根川	歴史的人物	船津伝次平
	吹割の滝		田山花袋
	榛名山		新島 襄
	吾妻溪谷		塩原太助
	鬼押出し (浅間山)		関 孝和
	三波石		新田義貞
	妙義山		呑龍上人
	尾瀬沼		内村鑑三
	赤城山		杉木茂左衛門
	谷川岳		
温泉・観光	金山	産業・交通	交通要地高崎市
	雷と空風		水力発電
	伊香保温泉		伊勢崎銘仙
	四万温泉		機業地桐生市
	草津温泉		まゆ・生糸の生産
史跡	水上温泉	文化その他	下仁田ねぎ・こんにゃく
	花山公園		清水トンネル
	白衣観音		県庁所在地前橋市
	富岡製糸場		200万人人口
	中仙道 (安中杉並木)		八木節音頭
	多胡碑		義理人情にあつい性格
	碓氷の関所		群馬県の形 (つる)
茂林寺			
貫前神社			
二子山古墳			
金山城			

注) 但し「太田金山子育て呑龍」と「雷と空風義理人情」「水上、谷川スキーと登山」の読み札については複数の事象を取り上げている。

上毛かるたの読み札について山口ら (1995) の記述に基づいてその特徴を調べてみると、特徴が三つ指摘できる。

A.上毛かるたは「いろはかるた」の伝統を受け継いだ七五調形式をとっている。

B.すべての読み札の漢字に読み仮名付けされていることは、漢字を読むのが比較的困難な幼い子供たちでも遊べるように配慮した結果と思われる。

C.七五調の七五を合わせた十二音という数で、リズムを感じながら、適当に終止符を入れて、長・短を歌うことができる。

このように見ると、上毛かるたの読み札が読みやすいということがわかる。その結果、多くの群馬県民は、知らず知らずのうちにその読み札を脳裏に留めていくようになり、

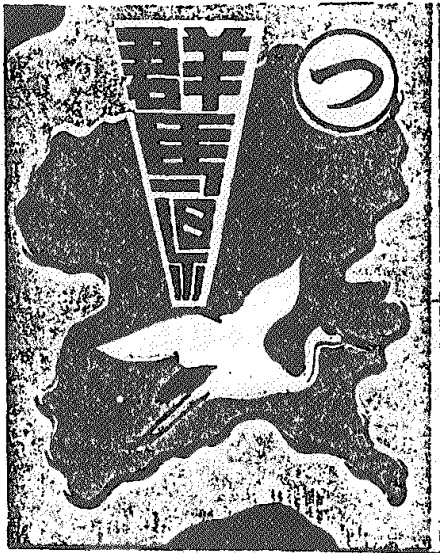
群馬県内随所で「上毛かるた」の読み札が「郷土の言葉」的な記号・暗号として、しばしば用いられるという“奇異”な現象を生み出していったという。

② 絵札の分析

絵札も読み札と同様、何度も何度もかるた遊びをしているうちに、その情景が印象深く脳裏に焼き付けられていくものと考えられる。

山口ら（1995）の研究によると、絵札は一つの情景で読み札（題材）を十分に表現しなければならない。そのため、作成するにはある対象に対する洞察力、見る者の想像力を掻き立てるような豊かな筆力等が要求されるという。絵札を担当した小見辰夫は、実用美術の研究に長く従事していた画家で、伯父の丸山清康（上毛かるた解説文の執筆担当者）から絵札作成を依頼された後、構想をまとめ、描き上げたというが、この絵札はそのあと、小見自身の筆により当初の趣をなるべく崩さないよう描きなおされ、昭和43年新版となって発行された。その理由は“実物大の原画を別の用紙に引き写す当時の手描き製版に代わって新しく写真製版が可能になったため”ということである。

新版と旧版の絵札を見てみよう。



第一図 「上毛かるた」の「つ」の絵札

左は旧版、右は新版

「つる舞うけいの群馬県」の札をみると、旧版の「群馬県」の大文字が新版では消え、市を表す符号が9つに増え、県庁所在地前橋市のまわりに日の丸の絵が描かれている。この変化の意味するところは、以下のように報告されている。

制作時では群馬県そのもの復興を目指されていたことから、県という意識を県民に強く持たせるためにも、「群馬県」と大きくアピールする必要があった。それから時代が過ぎ、群馬県は市の増加を見るまでに発展し、制作時の戦後復興は一通り達成したような状態になった。

山口ら（1995）は旧版と新版の絵札を比較して、次の3点を指摘している。

- A. どれもより実体に近づいた写実的なもので、絵画的な美しさが増している。
- B. 時代の移り変わりを物語るような札があって興味深い。
- C. 文化を具現化したものの一つであるとアピールすることにもつながった。

上毛かるたの絵札は全体的に変えたことがあるが、群馬県のアピールを表すことはずっと同じである。素人として、全部44枚の絵の芸術性が高いかどうかは判断できないが、どれも親しみやすい絵になっていると考えられる。

（2）上毛かるたの遊び方

上毛かるたの競技の心がけといえば、すなわち、“かるた遊びを楽しみながら、郷土に関する知識を深化させ、郷土に対する愛情を高め、礼儀正しさや規範性を育成する”等が明示されている。

インターネットより探した資料をまとめると、遊び方のルールは以下の通りである。読み手は、必ず最初に「つる舞う形の群馬県」を2回読み、その次に読む札から競技が始まる（本読み）。読み手は各読み札を必ず2回ずつ読む。2回目が空読みとなり、それは次の本読みの予令を意味する。選手は、この空読み（予令）によって本読みに対する心の準備ができるわけで、いきなり本読みされると心の準備ができない。最後に2枚残った時点で、残り札を左右に並べ直す。どちらの札が残っても、横に30cm離して並べ直し、空読み後に読んだ札（最後から2枚目）を取った側が、自動的に最後の1枚も得る（したがって、最後の1枚は読まない）。得点の計算は、1枚1点とする。点数が高いほうが勝つ。

競技県大会の競技方法は、個人戦と3名1組の団体戦に分ける。得点の計算は、1枚1点とするが、団体競技の場合は、次のような「やく札」がある。以下のとおりである。

団体戦では「つ」「ち」「け」を揃えると役となり、10点加算される。

同様に「お」「か」「め」「き」「け」を揃えると、20点加算。

「す」「も」「の」は10点加算。

なお、個人戦も含め、「つ」はドロー時の判定（持ってる方が勝ち）になるので、ぜひ取っておきたいということである。

そして、山口ら（1995）によると、「上毛かるたの遊び方」または競技ルールがこまごまと規定されている別の理由には、県大会や県内各地域、各レベルで活用されるときに、遊び方を巡って起こりうるトラブルをできるだけ回避、もしくは迅速に対応するためということが考えられる。

第3章 (Chapter 3) 上毛かるたの魅力と影響

上毛かるたの魅力と影響について4人にインタビューを実施した。調査対象は、群馬大学社会情報学部の学生TさんとYさん(共に20代)、筆者のアルバイト先の店長さん(40代)、国際センターの美術の先生(60代)の計4名。以下にそのインタビューの質問内容とそれに対する回答の詳細を記述する。

場所：群馬大学社会情報学部研究室 日時：2015年7月13日 11時～

①群馬大学社会情報学部の学生TさんとYさんに対する質問と回答

質問1：TさんとYさんは20代ですが、小学生時代に上毛かるたをして、何かおもしろい経験や思い出はありますか？

解答Tさん：はい、あります。私が小学生の頃は、住んでいる地域ごとに上毛かるたの大会がありました。かるたの大会に向けてみんな札を覚えました。

解答Yさん：はい、あります。上毛かるたを通して礼儀を身につけることができたと思います。上毛かるたでは、正座をして札をしてから始めるので、ルールを覚えながら自然と礼儀作法を習得することができたと思います。

質問2：群馬県民からみた上毛かるたの魅力は何ですか？

解答Tさん：上毛かるたの魅力は、今まで知らなかった群馬県内の名所や特産物について改めて知ること、県民であってもより群馬に親しみを持てることが挙げられると思います。上毛かるたを通して、今まで知らなかった場所やものについて知ることができるので、そこから実際に現地へ赴いてみようという気持ちになるのではないかと思います。また、再度群馬県の名所や特産物についての知識を深められるので、群馬県で生まれ育った県民としては、上毛かるたは群馬県民としての誇りを再認識させてくれるものかもしれません。

解答Yさん：私にとって上毛かるたの魅力は、「上毛かるたを知っている」ことで群馬県民としての共通意識を得られるので、かるたによって県民の地域愛がより深まることにあると思います。また、他県民に対して群馬県の名所や特産物などをアピールする方法として上毛かるたが活躍し、それによって他県民が群馬県を理解するのに役立っていると思います。

質問3：上毛かるたの影響は何かありますか？

解答Tさん：群馬県の名を他県に広める宣伝の効果があるのではないのでしょうか。

解答Yさん：群馬県は、公共交通機関が少ないので、県民同士のつながりが薄い傾向にあると思います。しかし、上毛かるたによって県民同士の共通の県民意識が生まれていると思います。

質問4：今まで上毛かるたに取り上げられている名所にほとんど行きましたか？

解答 T さん：残念なことに、私の出身は富岡なので、富岡製糸場の他にはあまり出向いたことがありません。しかし、今後は機会があれば積極的に上毛かるたで取り上げられている各地の名所を訪れたいです。

解答 Y さん：私の出身は高崎なので、高崎全般の名所は訪れたことがあります。他の地域は今までなかなか訪問できなかつたので、これから色々な場所へ行ってみたいです。

場所：アルバイト先ラーメン店「翔鶴」 日時：2015年7月16日、22時

②アルバイト先の40代店長さんに対する質問と回答

質問1：店長さんは子どもの時、上毛かるたに関する思い出がありますか？

解答店長さん：今は41歳ですが、子どもの頃に遊んだことを覚えています。県の競技大会には参加したことが無いけれど、子ども会の際やその他には友達と一緒にいつも夜に上毛かるたをやっていました。子ども会の際には、かるた自体に興味はあったものの、それ以上にごほうびなどの賞品を貰うために上毛かるたに取り組んでいたように思います。また、今でも同窓会などで旧友らと集まる機会があると、「また上毛かるたをやろう」というような雰囲気になります。

質問2：上毛かるたの魅力と影響について何かありますか？

解答店長さん：上毛かるたは、一種のシンボルとして群馬県民の地域愛をさらに深め、県民としての一体感が生まれると思います。そして、子どもたちは集まって練習し、かるたというゲームを通して協力し合うことによって、協調性を養うことができると思います。また、現代の子どもたちの多くは、勝ち負けについての教育は身につけていないけれど、上毛かるたによって勝敗が決まるため、勝負を通して子どもたちの精神力を鍛えることができるのではないのでしょうか。これは、群馬県の子ども教育の長所だと思います。

質問3：今まで上毛かるたに取り上げられている名所にほとんど行きましたか？ また、上毛かるたについての考えがあれば教えてください。

解答店長さん：私は、今までほとんどの名所に行ったことがあります。しかし、より具体的な詳細についての理解はなかなか難しいものがありました。上毛かるたの札の中には、群馬県の人口を示しているものがありますが、これは、160万→180万→200万というように時代と共に書き換えられているので、上毛かるたは不変的なものではありません。

場所：群馬大学国際交流センター 日時：2015年7月23日 11時

③国際交流センターの60代美術の先生に対する質問と回答

質問1：先生は子どもの時、上毛かるたに関する思い出がありますか？

解答先生：私は館林の出身なので、その関連する好きな札があります。まず一つ目は、「花山公園つつじの名所」という札です。そして二つ目は、「分福茶釜の茂林寺」という札です。そして三つ目は、「誇る文豪田山花袋」という札です。これら3つの札が特に気に入っていたので、田山花袋の小説に特に興味がありました。これは、館林市民の特別な

思い出だと思います。

質問 2：上毛かるたの魅力と影響について何かありますか？

解答先生：まず、魅力として挙げられることは、ゲームとして群馬県の産業や文化を覚えることができることであり、群馬県民の仲間意識を深めることができるということです。また、上毛かるたの読み札のリズムがいいので、読んでいるときに気持ちがよく、楽しめる場所です。また、節をつけて読むことは面白く、その節の付け方は昔から地域によって異なるので、その点についてもとても興味深く面白いと思います。上毛かるたの絵札の絵は途中で変わりました。これらの絵の芸術性が高いかどうかはわかりませんが、どれもみな親しみやすい絵になっていると思います。

質問 3：今まで上毛かるたに取り上げられている名所にほとんど行きましたか？ また、上毛かるたについての考えがあれば教えてください。

解答先生：私は今までほとんどの場所に行ったことがあります。しかし、個人的な意見になりますが、上毛かるたに出てくる名所は群馬のすべてを網羅しているわけではないと思います。新しい札を創ってみてはどうでしょうか。上毛かるたは昭和 22 年に作られ、私自身は昭和 23 年に生まれました。そのため、この上毛かるたの歩みに関しては実感があります。上毛かるたは、それが創られた時期が大切であると思います。なぜなら、県民に郷土愛を沸かせることにより、みな安心して暮らせるようになると思うからです。

インタビューのデータをまとめると、以下の結果が考えられる。上毛かるたの魅力といえば、20 代の大学生と 40 代の社会人と 60 代の高齢者は大体同じような考え方をしているといわれる。群馬県民に対して、まず、上毛かるたのゲームを通し、知らず知らずのうちに群馬の郷土文化を覚え、土地に対する理解を深められる。これは魅力点の一つと思われる。また、群馬県の共通機関が少ないから、同一のシンボルが少ない、県民のつながりはあまり強くない。しかし、上毛かるたを通して、群馬県民の仲間意識と共通意識を深められる。大部分の群馬県民にとって、これも上毛かるたの一つ魅力点だといわれるかもしれない。そのうえ、読み札のリズムもいいし、節をつけて読むこともできる。みんな面白い競技を行いながら楽しめるといってもいいと思っている。そして、他県民に対して群馬県の名所や特産物などをアピールする方法として上毛かるたが活躍している、それによって他県民が群馬県を理解するのに役立っていると考えられる。

上毛かるたの影響が目立つ。インタビューのデータを簡単にまとめると、次の 3 点が指摘できる。まず、上毛かるたは子供向けのゲームだから、教育の効果が著しいと思う。子供は読み札の内容を覚えながら、群馬県の知識と歴史を理解でき、国語の勉強にも役立つ。子供会と競技県大会のとき、札にはじめ札に終わるという礼儀、ルールを守りことも大切だといわれる。これは子供の規範性の育成に役立つ。マナーということだけではなく、試合のとき、迅速に考えて手を出す、瞬発力、つまり反応能力もよくなる。採点の結果を通じて、勝負意識も知らず知らずのうちに鍛えられる。次に、上毛かるたはアイ

デンティティの育成に大きい影響を与える。インタビューした結果からみると、20代も40代も60代も、みんなは子供時代から今まで上毛かるたの読み札の内容を覚えており、郷土意識がずっと脳裏にとまっている。つまり、同一性を持って、統一の群馬県という意識が感じられる。そして、地域への意識がずいぶん強化されたと思われる。44枚の札を通じて、群馬県のアピールすべき事項はほとんど紹介されており、名産と名所を了解しながら、群馬県民としての誇りを再認識し、地域への意識を高め、地域愛がより深まるといっても過言ではないと思っている。

もう一つ見られた結果は、年齢層によって群馬県民の現地体験が違うことである。20代の学生たちはまだ若いので、出身地以外の地域はなかなか訪問できていない。40代の方は今までほとんどの名所に行ったことがあるが、名所の歴史や文化などの具体的な詳細についての理解はなかなか難しいといわれる。しかし、60代の高齢者は考え方が少し違う。上毛かるたと一緒に成長した先生は、ほとんどの場所に行っているが、44枚の郷土文化の紹介では足りないと思い、上毛かるたに出てくる名所は群馬の一部だけなので、新しい札を創ってみたいと言っていた。年代の変化につれて進んでいたこのようなコメントは、上毛かるたについての考え方が年齢によって変われるということが証明されたと思う。

第4章 (chapter 4) 上毛かるたに見る日本文化の姿

上毛かるたは群馬の名産だけではなく、日本の郷土かるた文化の代表でもある。したがって日本文化の姿も見られると思う。筆者の考えをまとめると、次の3点が指摘できる。

(1) 歴史、民族を守って根性が強い日本人

日本人は自分たちの住んでいる土地に対する愛情をもっていることが、この郷土かるたの事例を通じて読み取れる。上毛かるたが創造されたきっかけは、戦後の日本を建設し直し、人一倍郷土を愛し、誇りを作り、群馬の子供たちには愛すべき故郷の歴史、文化を伝えたいということである。これから、日本人の民族への配慮をみられるだろう。子供は民族の未来といわれ、子供の成長に込められた心がけと希望の中で、民族への愛情も現れされたと思われる。そして、歴史名産に基づいて作られた上毛かるたから考えると、歴史に対する尊重の態度も直接見られると思われる。たとえば、「日本で最初の富岡製糸」、「歴史に名高い 新田義貞」、このような読み札は、群馬県民としてのほこり、新生活への期待を引き起こして、歴史を忘れずに一生懸命生きていける感じが伝えられると思われる。多くの札をみて、未来への期待を抱かせ、苦境を乗り越えて前進していこうと県民のところに強く呼びかけるようなメッセージを感じ取れるのではないだろうか。

(2) 舶来品を真似し、自分で創造できる日本人

日本の「かるた」は西洋から伝えられたものが原型であるが、独自の文化を形成していった。そこまでいけば、もはや模倣とはいえない。それはみごとな創造である。いや独創というべきなのであろう。久保田(2015)によると、アジアに「カルタ」を持ち込んだのは、大航海時代のポルトガル人である。鉄砲やキリスト教伝来の16世紀中ごろのことだ。江戸時代になると、ポルトガル系のカルタは、めくりカルタなどの遊びとして続く一方で、日本独自のカルタ文化が開花したと述べている。今、世界に誇る「カルタ王国」としての日本は自分の特別のかるた文化を持っている、なぜかといえば、優秀な舶来品をまねし、新しいアイデアをつけて創造できる日本人がいるからである。かるただけではなく、あの戦争時代の前後、日本はヨーロッパから伝えられた技術が少なくない。そのあとほとんど進化して自分の先進的な技術を形成している。この視点から見ると、上毛かるたの作り方は日本人の創造性を十分に表している。

(3) 子供の成長教育を重視する日本人

上毛かるた競技県大会とか、子供たちの試合とか、このようなイベントは、群馬の子供たちに愛すべき故郷の歴史、文化を伝えていると思う。上述した通り、上毛かるたは群馬県の子供たちの成長の中で、大切な役割を果たしている。

山口ら(2009)によると、かるたといえば、百人一首やいろはかるた等、群馬県民を含む日本人にとっては親しみ深い遊びだと思うが、今の子供たちの遊びといえば、TVゲームやパソコンゲームが主流で、かるたと言ったら国語の時間で百人一首に触れるくら

いだといえると思う。しかし、群馬県の子供たちは他とは異なり、「上毛かるた」があるので、他県の子供と比べると格段にかるた遊びをする機会がある。このかるた遊びというのは、実は日本にしか見られない、外国には見られない日本独特の文化ということである。もちろんトランプや単語カードなどのカードを使った遊びは外国にも多数あるが、日本のかるたのように、ある一枚の札に対して、深い関わりあいのあるもう一枚の札を選んでいく遊び、しかも遊びながら知らず知らずのうちに知識や教養まで身につけてしまうカード遊びというのはほかにないと述べられている。

西洋伝来のものは花札やトランプ等、娯楽性、賭博性が強い遊びである。しかし、日本人は、子供に向けの上毛かるたのようなカードゲームを創造し、知識と教養を育成できるゲームが作られた。これからみると、日本人には子供の成長教育に込められた努力が十分に見えるのではないだろうか。

結章 (Conclusion)

本論文では、上毛かるたの成り立ちと歩みについてみてきた。まず、第1章では、上毛かるたの歴史を振り返って、発行の経緯と競技県大会の歩みが明らかとなった。あの時代の背景を踏まえて、上毛かるたを創造した人々の心構えが良く分かった。また、第2章では、上毛かるたの札の内容を考察し、読み札の特徴と絵札の変化について分析を施した。上毛かるたは、札を読み上げるリズムが心地よいと、皆が親しみやすいと思われる。したがって、年齢や世代を問わず、札を記憶しやすくなると考えられる。さらに、第3章において、筆者は上毛かるたの魅力と影響について、20代、40代、60代の日本人を対象にしてインタビューを実施した。この結果から、群馬県民の上毛かるたに対する思い出や考え方が認識され、群馬県民でない筆者自身も群馬県民の土地への郷土愛を間近に感じることができた。最後に、第4章では、上毛かるたに見る日本文化の姿について触れることにより、同時に筆者自身の研究を進めた。したがって、本論文では、上毛かるたによって群馬県民の郷土愛が深まるということを確認できた。要するに、群馬県の郷土文化についての理解が深まり、新しい発見ができた。

中国は日本と近隣関係にあるが、今まで中国国内において、上毛かるたのような地域の特徴を表したカードゲームはみられない。今後は中国でこのような地域愛を深める子ども向けの遊びがあるかどうか探してみたい。

参考文献・ウェブページ

- 1 原口美貴子・山口幸男 (2009) : 「郷土かるた、上毛かるたの魅力と意義—郷土かるた王国「群馬」からの発信—」群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編第59巻 pp.9-20
- 2 原口美貴子・山口幸男 (1995) : 『『上毛かるた』の札の分析—社会科郷土学習の基礎資料として—』群馬大学教育学部紀要 人文社会編 第45巻 pp.197-214
- 3 久保田福美(2015) : 『『上毛かるた』と社会科教育～教材としての「かるた」の意義と役割、有効性について～』
- 4 新井克昌 (編) (1997) : 『上毛かるた 50年の歩み』群馬文化協会、全136P
- 5 上毛かるたで群馬県ガイド <http://joumoukaruta.com/hajimeni/rule.html> (2015年7月27日アクセス)
- 6 日本文化いろは事典 : http://iroha-japan.net/iroha/B04_play/06_karuta.html (2015年7月27日アクセス)